

「国語科教育におけるマルチメディアの活用」趣旨と振り返り

近 藤 聡

本学会より、大会シンポジウムのコーディネーター(司会)に指名していただき、テーマ「国語科教育におけるマルチメディアの活用」を与えていただいた。本稿の執筆にあたり、趣旨の設定からシンポジウム全体を通し、振り返らせていただくと思う。

一 趣旨文および、メディア環境についての現状認識

マルチメディアの発達によりメディア環境は変容している。このメディア環境の変容は、言語環境、教育環境の変容をもたらしている。国語科教育が以上のメディア環境について検討するのは必然であり、テーマ「国語科教育におけるマルチメディアの活用」は時宜を得たものと考えられる。シンポジウムの準備段階で、登壇者と連絡を取りつつ、趣旨文を次のように設定した。

「メディアの発達した社会環境において、それに教育環境が対応していく必要性が高まっています。特に、学校でのSNS等を利用

したとり組みがメディアで紹介されるなど、マルチメディアと教育との関係は注目され、関心を集めています。

しかし、国語科での実際の導入にあたっては、授業内容、メディア機器の問題、その他、多くの検討すべき課題があります。

本年度のシンポジウムは、「国語科授業におけるマルチメディアの活用」というテーマで、国語科教育にとって避けられない問題として、マルチメディアの活用について意義ある提案ができるよう、パネルディスカッションをおこないたいと考えております。」

マルチメディアについては、メディア機器およびメディア環境がいまだ発展途上にある。マルチメディアの総体、全体像をとらえるのは現時点では困難であろうし、マルチメディアに対する問題意識は多岐に分かれていると考えられる。これらは、本テーマを扱うにあたって難しい点であったが、登壇者の提案が三者三様の明確な方向性をもっており、提案された三通りの視点を通して

マルチメディアの活用について焦点をもつて議論できるようにつとめた。

二 登壇者による三様の提案

登壇者として、山田桂悟氏（株式会社三省堂・飯野久美氏（法政大学女子高校）・黒川孝広氏（吉祥女子中学・高校）にご提案いただいた。マルチメディアについて、デジタル教科書を主としたメディア開発・教材開発（山田氏）、実際の授業に基づく授業実践と学習者の実態（飯野氏）、学術的な歴史研究および理論研究（黒川氏）を三氏は発表された。山田氏、飯野氏は、デジタル教科書の実態、授業実践の実態の発表に際し、映像を有効に活用された。

シンポジウムでは、まず、三氏の発表内容から、マルチメディアについて①先端的な教材化の現状・②学校教育一般の授業実践の現状・③理論的な背景を、フロアーと共有した。次いで、この情報をそのまま視点として、①②教材開発や授業実践はどこまで進んでおり、今後何ができるのかという検討、③歴史のかつ理論的な検討に関して、議論を進めようとした。「マルチメディアの活用」の有効性や問題点が浮かび上がるのをねらいとした。登壇者とフロアーの問題意識と協力により、シンポジウム全体は拡散せずに収斂した議論の進行になったと考えている。

三 フロアーとの質疑・協議

フロアーからは、数多くの質問があった。いくつかを上げる。教材開発「学校という制度は、今のメディア環境の水位に追いついていない、という指摘がある。しかし、学校はどうあるべきか。マルチメディア環境の推進によって、大きく抜け落ちてしまう要素はないのか。」発表資料の文科省指定校の傾向では、教師が1時間の授業の教材作成に5時間かけている。教師が今まで以上に多忙化する。教師の疲労は重要な問題ではないか。」

授業実践「国語科の授業において、効果のある分野と、効果が期待できない分野の検討が必要。特に、後者を明らかにすべきではないか。」「マルチメディアを活用する／しない場合の学習者の反応にどのような違いがあるか。」「従来の調査結果を中心とした評価方法から、新たな評価方法を考えていく必要があるように思うが、現状でどのような評価が考えられるか。」

理論研究「黒川氏が提言された、分かりやすくすることが、学習者の学習内容の長期記憶化を妨げるという点。デジタル教材の導入には、それによって学習活動から失われるものの意識化が必要ではないか。」「（分かる）ことには便利だと理解しました。（能力を鍛える）ためにはマイナス要因があるのではないのでしょうか。功罪の『罪』の部分について、どうお考えかうかがいたい。」

協議では、ほぼ解決した論点もあれば、検討課題となった論点もあった。たとえば、「評価方法」については、「文章の読解のようにはベーパーテストで数値化して評価するのに適さない分野がある。メディアリテラシー教育の評価では、最後にレポートを課して評価方法とした。」などの実践例が紹介された。

また、黒川氏が発表で述べた、「短期記憶 short-term memory」「長期記憶 long-term memory」という概念がフロアーの注目を集

めた。短期記憶は、一度見ただけで記憶でき、短い間は覚えておけるが、時間が経つと忘れてしまう記憶である。フロアーからは、マルチメディアの活用は短期記憶にならないかという懸念があった。

(東京都立小松川高等学校)

四 シンポジウムを振り返って

私はコーディネーターとして、「国語科教育におけるマルチメディアの活用」を議論するのに、二つの方向性を想定していた。

一つは、国語科教育の従来の教育内容・領域(文章の読解、文章の作成、発表学習など)のための、有効な補助教材としての活用についての議論である。この点は、登壇者とフロアーによって、かなり情報を共有し、議論をおこなえたかと思う。

もう一つは、国語科教育において主ではなかった教育内容・領域を、クローズアップする可能性についての議論である。この問題意識は、私自身の研究対象にも由来している。私は、カナダの国語科におけるメディアリテラシー教育の発祥を継続して研究している。カナダのメディアリテラシー教育は、メディアを認識の形成過程すなわち「言語」として、メディアを通して社会認識、自己形成をする国語科教育として成立した。このような、従来は主ではなかった領域を導入する可能性については、充分には議論できなかった。黒川氏は、発表の中で、ICTを利用した教育は、「認知スキル」「社会スキル」の向上に有効であることを指摘されており、そこから議論を展開することはできたと思う。国語科教育におけるマルチメディアの活用について、メディアという「言

語」による新たな可能性を検討できる機会があるように願っている。